

## HavelokのスキャンションとFinal -enについて

— G. V. Smithers の説をめぐって —

酒 見 紀 成

Chaucer の詩行はスピーチ・リズムに従って読むべきであり、行中だけでなく脚韻でも語末の -e は発音されないという説が立てられたり、Halle and Keyserの理論が現れたりして、相変わらず Chaucerの韻律に対する関心は高い。主な問題点を筆者なりに整理すると、次のようになる。

- 1) Chaucerの詩行は decasyllabic か four-beatか
- 2) trisyllabic foot を認めるか否か
- 3) caesuraを認めるか否か
- 4) Chaucerの韻律は short coupletの詩に使われている four-stress line と同じか否か

1) に関しては、まだ弱強5歩格とする学者の方が多い。例えば F. N. Robinson, N. Davis, T. F. Mustanoja, M. L. Samuels, B. A. Windeatt, G. V. Smithers 等である。2) は3) と関係しており、三音節の詩脚を認めることに消極的な者も、'extra' unstressed syllable が中間休止の所に生じることはあり得ると考えているようである。またこれはどの程度 apocopeや syncopeを認めるかとも関係しているが、消失よりも走読(slurring)の方を好む学者もいる。Windeattも言うように、<sup>1</sup> 'Troilus'は大抵3音節であるが、l. 568では走読されて2音節になる。中間休止については、最近あまり積極的に認めない傾向にあり、Windeattも "Ch's attitude to the break is much more flexible, for by its very variability the caesura cannot be part of his metrical norm." と言っている。Smithersも同じ考えで、Chaucer のそれはせいぜい 'syntactic break' であり、そこでは詩行の他の位置と同様 elisionや syncopeが起こると言う。<sup>2</sup> 4) については、すでに Ten Brinkが Chaucerの four-stress line の構造は以前の short coupletのそれと本質的に変わらないが、enjambmentを巧みに用いているなど Chaucerの方が技巧の点で優れていると言っている。<sup>3</sup> 最近では Smithers が Havelokの韻律は *House of Fame* だけでなく *Canterbury Tales* のそれとも大変よく似ていると述べている。ここで思い出されるのは、英語史の本に出ている Chaucerの行中の語末の -e の消失に関する統計で、それによれば *Book of the Duchess* 55.1%, *Parliament of Fowls* 35.2%, *House of Fame*

20.3% と大きく開いている。<sup>4</sup> これはどう解すべきであろうか。また、かつて four-foot lineについて、英詩では音節の数よりもアクセントの数を一定にと言われていたことは<sup>5</sup> 訂正されなければならないのだろうか。

本稿では Kökeritz と同様に 3 音節の詩脚を認めない Smithers 教授の *Havelok* の韻律分析について、特に語末の *-en* の扱いについて考えたい。彼は *Hav.* の詩行には on-beat と off-beat が一つずつ交互に現れ、on-beat は 4 つ、ただし詩行が on-beat で始まったり、feminine rhyme で終わったりすることがあるので、基本的な型は (x) / x / x / x / (x) であり、beat は音節と等価であると考え。そこでこの型に合致しない詩行は inversion を除いてすべて 'corrupt' されていることになる。例えば、弱音節が 2 つ連続したり、強勢のある音節が連続する詩行、或いは強勢が 3 つだったり、5 つだったりする詩行は何とかして正規の型に合わされなければならない、とされる。

無強勢音節が連続する場合、いずれかが語末の *-en* (不定詞、現在複数形、過去複数形、過去分詞、二三の名詞の複数形の語尾) を持つことが非常に多い。このような *-en* を Smithers は詩人のものではなく、写字生が付け加えたものであると言い、全部で 213 例認め、彼の校訂本<sup>6</sup> の Introduction (p. xciii) にそれが現れる行を列挙している。(その中の 3 例 *hosen and shon* 970, *broken* 1239, 及び *brepren and* 2414 では、*-en* が詩人のものでないとは必ずしも言えないと思う。)<sup>7</sup>

確かに写字生が一部の *-en* を付け加えた可能性はある。高橋久教授によれば彼は種々のエラーを犯しているからである。<sup>8</sup> *-n* の明らかな誤りとしては、単数形が来なければならない所に *-n* が付いているものがあり、<sup>9</sup> Smithers は *diden* 79, *dwellen* 1352, *haeden* 2525, 2857 を挙げ、また *uten* 843 は ON *uti* 'at an end' に由来するので、*-n* は 'incorrect' であると言う。しかし他にもまだある。*weren* 193 と *deden* 1177 がそうで、*speken* 1071 も *speke* 'report' の誤りである。また *weren* 2414 も接続詞 *ne were* の一部であるとすれば *-n* は誤りとなる。さらに高橋教授がその "Notes on Rime Words of *Havelok*"<sup>10</sup> の中で Inexact rimes (a) *-e* (non-verb) : *-en* (verb) として挙げておられる *holden* : *holde* (= 'old'), *sowen* : *lowe*, *riden* : *side*, *grauen* : *name* においても、形容詞に *-n* は付かないし、*siden* とすれば複数形になるので、動詞の *-en* は *-e* の間違いであろう。最後の例では *name* を Smithers は 'naue(n)' と emend しているが、それは写字生が分かりやすくするために、原文の *nauen* < ON *nafn* を *name* に直したとする Sisam の説に与するからである。この種の不正確韻は他の脚韻詩にも見られ、A. McIntosh が *Hav.* と同じ Norfolk の方言で書かれていると言う<sup>11</sup> *The Bestiary* の中にも *winnen* : *inne* 163-4, *dragen* : *lage* ('low') 189-90 があり、Bennett and Smithers はやはり 'possibly *-e* in *dragen*' と考えている。<sup>12</sup> しかし、これも同じ方言とみられる *Genesis and Exodus* には *reste* : *lesten* 11-2, *mete* : *eten* 363-4 等があり、R.

Morrisは“the *n* must have been *very slightly* touched”として、*-e* に *n*を補っている。<sup>13</sup> *-n* は発音されなくなりつつあったが、つづりの上では保持されたということであろうが、その場合にはむしろ写字生が *-n* を落とした可能性が高い。そのような例は実際に存在する。*Troilus and Criseyde* の I, 741 の脚韻語 *ybeten* は次行の *treten* と韻を踏んでいるが、*ybeten* が *bete* と書いてある写本がある。<sup>14</sup>

Skeat は、*Hav.* の韻律は *Genesis and Exodus* より規則的であるが、大体同じであると言ひ、*-en* の発音について次の3つを挙げている。

- 1) 十分に発音される
- 2) 速く発音される (slurring)
- 3) 特に *r* の後で、前の音節に組み入れられ、発音上一音節になる (例えば *boren* や *woren*)

そして母音或いは *he* や *have* の前で非常によく走読されるが、これは *-es*, *-el*, *-er*, *-ere* のような語尾についても言えるとしている。その K. Sisam による改定版<sup>15</sup> (以下 SS と略す) では、韻律上必要でない *-e* や *-en* には、母音の下にドットが付けてある。*-e* だけ落とすわけであるが、SS も 2 音節の詩脚が 1 音節になったり 3 音節になったりするのを ‘normal licence’ として認めるので、ドットの付いた *-en* の数は多くなく、全部で 47 例である。<sup>16</sup> そのうち *-en* が *r* の後ろに来ているものが 29 例 (*weren* or *woren* 23 例, *aren* 5 例, *beren* 1 例), *l* の後ろにあるのが 8 例 (すべて *sholen* or *shulen*) であり、両方で全体の 78.7 % を占める。従って SS は Skeat に倣って大体 *r* や *l* の後の *-en* について *e* を発音しないことが分かる。残りの 10 例では他の子音 (*v*, *m*, *t*, *w*, *þ*, *g*) の後に *-en* が生じており、*Sipen* 1391 を除いて他はすべて連続する 2 つの弱音節の最初の音節に位置している。しかし、この位置に生じる *-en* は Smithers の勘定では 193 例存在するので、なぜ 9 例でだけ *e* を発音せず、他では走読されると考えるのかよく分からない。

一方、Smithers の韻律分析は機械的であり、その意味では分かりやすい。彼は *-en* をそれが現われる ‘phonetic and rhythmical context’ によって 6 つに分ける。type 1 から type 3 までは *-en* が 2 つの連続する弱音節の最初の要素である場合、type 4 は *-en* が 2 つの連続する弱音節の 2 番目の要素である場合、type 5 と type 6 は弱音節が連続しない場合である (C は子音, V は母音を表す)。

|  |                 |        |
|--|-----------------|--------|
| 1. $\check{\text{-en}} + \check{V}$            | komen into 1002 | 他 92 例 |
| 2. $\check{\text{-en}} + h\check{V}$           | shulen he 1347  | 他 51 例 |
| 3. $\check{\text{-en}} + C\check{V}$           | greten for 449  | 他 47 例 |
| 4. (a) $\times \check{\text{-en}} + \acute{V}$ | haueden of 181  | 他 4 例  |
| (b) $\times \check{\text{-en}} + h\acute{V}$   | Wolden he 1058  | 他 1 例  |
| (c) $\times \check{\text{-en}} + C\acute{V}$   | aren comen 161  | 他 13 例 |

|                |                    |              |
|----------------|--------------------|--------------|
| 5. -ĕn + CÚ    | pulten with 1024   | 他 584, 600 等 |
| 6. (a) -ĕn + V | haueden alle 238   | 他 49 例       |
| (b) -ĕn + hV   | wrungēn hondes 152 | 他 27 例       |

Smithersは弱音節が連続する type 1 から type 4 までのすべての *-en* を 'spurious' と見做す。さらに type 5 のそれも 'suspect' であると考えるが、彼の字余りのリストには載せていない。弱音節が連続しないので、容認したのであろう。要するに、彼は Skeat や SS が走読されたとした *-en* をすべて写字生が加えたものとして発音したくないのである。

*-en* が最も長く保持され、発音されたのは、弱音節が連続せず、後ろに母音或いは *h* で始まる強勢を持つ音節が続く場合 (type 6) である。これは Chaucer の詩でも同じである。G. Kane と共に *Legend of Good Women* の校訂を進めている Janet M. Cowen も、そのような音声的環境にある *-en* が写本に *-e* と書かれている時は *-en* に修正するのが望ましいと言っている。<sup>17</sup>SS もそうしている (例えば *shulde(n) him* 442, *yeme(n) and* 2153, *to fyht(en) wode* 2362, *wreke(n) of* 2850, *dide(n) al* 2893 等)。Smithers が詩人のものであると言うのは、hiatusを防ぐこのような *-en* だけである。従って、子音で始まる強勢を持つ音節が後続する環境にある *-en* (type 5) も、弱音節が連続しないにもかかわらず、詩人のものかどうか疑わしいと言う。*-e* だけでも弱音節を形成すると考えるからであるが、だからと言って *-n* を写字生が付け加えたことにはなるまい。

ところで、SS が *-e* を落とした 47 例のうち、Smithers のリストに載っていないものが 12 例もある。その不一致が異なる韻律分析のためと思われるものが 7 つほどある。(S. は Smithers のスキャンション)

- 620 Lóuerd, wé aŕen bópe þíne, (S. we áren bópe)  
622 Lówerd, wé sholen pé wel féde, (S. we shólen pé)  
1923 Als ít werē dógges þát werēn héngeð; (S. dógges þat wéren héngeð;)  
1957 Cómēn her mó þan síxti þéues, (S. Cómēn hēr mó þan)  
2292 And hé werēn álle dún(e) sét, (S. wéren álle dun-sét)  
2955 Fór he sáw þat hé wōren yáre (S. he wóren yáre)  
748 And só shulēn (mén) it cállēn áy (S. Ánd so shúlen cállēn it áy)

SS は 2292 では *-e* を補い、748 では *men* を補ったうえに、*callen it* の順序を入れ換えている。残りの 5 例は次の通り。

- 1015 Ðat ín þe bórŵ þanne wéren þóre;  
1147 Áren þe kókes, and Ích his knáue.  
1295 And míne ármes wéren so lónge,  
1391 Sīþēn yéde sóre grotínðe awéy.  
2362 Sergánz, þat wéren to fýht(en) wóde,

1147, 1295 および 2362<sup>18</sup> は Smithers の言う type 3 であり、1391 は type 4 だと思う

れる。彼はそれらを自分のリストに挙げるのを忘れたのであろう。逆に、1015の *-en* は発音されると思われる。

結論から言えば、筆者は2音節の詩脚が1音節になったり3音節になったりすることを poetic licence として認める伝統的思考方に賛成である。リズムとはある際立った言語的特徴が一定の間隔で繰り返し生じることと言われる。<sup>19</sup>従って強勢と強勢の間隔、つまり duration が重要になるが、W. L. Schramm によれば、強勢のある音節は平均して強勢のない音節の2倍の長さである。<sup>20</sup>Smithers もこの点は認めている。彼が弱声部の省略やその連続を疑問視するのは、それらの確実な使用例が少ないと思うからである。確かに Chaucer によって完成された弱強5歩格の詩には非常に少ないが、そこでも headless line は存在する。これを Ten Brink でさえ写字生のエラーと考えていたようであるが、今ではそれが dialogue や narrative で効果的に使われていることが指摘されている。<sup>21</sup>Skeat は *Hav.* の冒頭の2-4行を次のように scan し、

2 Wí|uēs, máyd|nēs, and ál|lë mén

3 Of a tá|lë þat |ích you |wíle téllë

4 Wo-só |'t wil' hér' | and þér|to duéllë

*-nes and 2, of a 3, および it wile 4*は速く発音されなければならないが、決して難しいことではなく、朗読が単調になるのを防ぐ意味で、“real improvement”であると言っている。このような詩行はあちこちに見られ、6行目にも *lí|têl hē yéde* とある。また、行頭の弱音節を欠く詩行や余分な音節を持つ詩行は *Genesis and Exodus* や tail-rhyme stanza の一連の詩にも普通に見られるので、これらを基本的な韻律形式の variation として認め、余分な音節を走読するのは妥当な方法と言えよう。

*Hav.* の三行目から SS は *þat* を除き、Smithers は *you* を除くことを提案している。このような *-en* 以外の要素から成る2つの連続する弱音節を持つ行が Smithers によれば約50存在し、そこでは韻律的あるいは統語的に不必要な語が、またしても写字生によって加えられていると言う。例えば次の 1125 では *Ne* か *non* が偽物であろうと言い、

1125 Ne shalt þou non oper louerd haue.

SS も *Ne* を省いているが、この文は 1123 の *Ne shalt þou hauē non oper king!* と呼応しているので、いずれの否定詞も省かない方が良いと思われる。聴衆が町人(‘*burgeys*’)であったことを考えれば、詩人が否定詞の多用を自制したとは考えられない。Smithers は 1683 と 2898 でも *ne* を省こうとしている。彼は *Hav.* では弱変化の形容詞に apocope は概して生じないが、例外も多いとして、2898 でも *Hauelok þe gode* と分析しているので、*ne* を省く必要はないにもかかわらず、“*ne* may be a scribe’s addition, despite the parallel in 2637” と言うのはなぜだろう。SS は 1683 でも 2898 でも *ne* を保持している。他に Smithers が写字生によって加えられたと考えている語には次のものがある。þe

1078, 1852, 2192; *for* 357; *of* 897; *to* 938, 1168; *and* 33; *or* 2105; *you* 3; *him* 859; *þat* 148; *forth* 869; *bere* 490; *And* または *þe* 755; *þer* または *pou* 1163; *Dat* と *was* 2535。このうち SS も省いている行は 1078, 2192, 938, 1168, 3 (*you* ではなく *þat*), 490 (2行前の *bere* がうっかり繰り返されている) であり, 2537では *was* と *king* の位置を入れ換え, 2537の *comen* の前に *was* を補っている。

また, Smithers は異綴りや異形態が持ち込まれたために詩行が乱されていると考え, 1005の *Englond* と *wer* はそれぞれ *Engelond* と *were* であるべきだと言い, SS もそのように修正している。他に *sworn* 204を *sworen* に, *maked* 58を *mad* (p. p.) に直し, 542 では *makede* を *mad* (pt.) に直すか *to* を省くかすべきであると言い, 724 と 1358 の *bi-gan* も *gan* の方が良いと言う。このうち SS は 724では *gan* に修正しているが, 1358では行頭の *And* を省き *bigan* の後に *to* を加えている。さらに 938の *Hauelok* と 1651, 1931 (= 2097) の *Ubbe* は元来 *he* であったものが写字生によって固有名詞に換えられたものであり, 598 では *Grim* が加えられており, 2298の *þe king* は前の行の *Birkabeynes* の説明的な言い換えであると主張する。SS はこれらの箇所ではすべて写本の通り読んでいる。それでもまだ説明できない連続する弱音節を持つ詩行が 16 あると言う。

仮に Smithers の言う通りであるとしても, addition は写字生によるものではなく, reciter の行ったものであろう。写字生はせいぜい自分の方言形を持ち込むくらいで,むしろ omission のエラーを犯しやすいと思われる。多くは不注意からであるが, 自分のミスに気づいた所では訂正しようとしており, 彼が自ら訂正した箇所が, 高橋教授の論文によれば, 約60存在する。<sup>22</sup>問題の *-en* についても *beden* 2085 の *-n* が expunct され, *-yemen* 2299 では *-n* の左の *minim* が消されている。従って彼は出来るだけ原文に忠実に筆写しようとしていたと思われるので, 213 もの *-en* を加えたとは考えにくい。*Hav.* は唯一の写本 (MS Laud) でしか伝存していないが, 他に Cambridge Fragment (d), (e), (f) に断片が残っており, McIntosh によれば, 14世紀末に写されたもので, *Hav.* の方言と大体同じである。そこで両者について, いずれか一方に *-en* が保持されている24箇所を比較すると, Fragment (d) は3箇所とも *-en* か *-n* を落としているが, Fragment (e) と (f) は MS Laud よりも *-en* をよく保持している (Frag. 18 : MS Laud 13)。これはどう解すべきであろうか。Smithers のように, Fragment は “too short, too late, and too debased” であるとして無視すべきであろうか (しかし, 彼は自分の校訂本では連句構造を壊してまで第 547行を Cambridge Fragment から補っている)。むしろ Fragment (d) は写字生の言語を, (e) と (f) は exemplar の言語を反映していると考えたい。つまり写字生が exemplar にあった *-(e)n* を落としたのである。

強声部の連続も Smithers にとって ‘abnormal’ である。その際 pause が弱音節の代わりをすると正しく考えるが, それでもポーズの所に欠けていると思われるものを補い —

*Knict (and)* 32, *Eng(e)lond* 61, *bad (he)* 1416, *(his) spures* 1677, *he (nouth)* 2229, *(ful) fele siþe* 2844 --, 433では *warie him*を *him warie*に直そうとする。SSも 1677と2229で *þo* を補う点が異なるが、他の5例では同じ修正をしている。しかし修正の困難な詩行が28あると言い、これらはすべてポーズが第二と第三の強声部の間にあるが、全体の1.2%に過ぎないと言っている。SSも28 (実際は27)<sup>23</sup> 例のうち23例では色々と修正している。しかし *Wóre he yúng, wóre he hólð* 1036, *Ál so bríth, ál so shír* 1254, *Ánd of dréng ánd of tháyn* 2185, *Js nón of ús, yúng ne óld* 2803 のような詩行が存在するので、詩人は (x) / x / • / x / の韻律を意識して使ったように思われる。ポーズの生じ得る位置があと2つある。第一と第二の強声部の間と第三と第四の強声部の間で、Smithersはそこにポーズが来る例は少ないので(2例と4例)、詩人のものではなく、ポーズが2つある 1679 は corruptされていると考えて間違いないと言い、SSもその7例をすべて修正している— *(wel) ney ded* 635, *(nou) ben erl* 682, *kok (un-) til* 892, *rim(e) nu* 2996, *þis (ilke) day* 1434, *and (ek) so* 2748, *Or he (ferre) fro him ferde* 1679。Smithersは 1434 に *her*を、1679に *þat*を補うだけで、他の5例については修正の仕方を提案していない。

このように *Hav.* には 'irregular' な詩行がかなり多い。Smithersの挙げている数字を合計してみると 319行となる。すなわち弱音節が連続する場合 (i) 一方に *-en* が含まれているもの -- 213, (ii) *-en* 以外の要素から成るもの -- 約50 (うち16行は説明困難)、強声部が連続する場合 (i) ポーズが第二と第三の強声部の間にある行 -- 35 (うち28行は修正困難), (ii) ポーズがそれ以外の位置にある行 -- 6, (iii) ポーズが二つある行 -- 1, (iv) 写字生が語末の *-e* を落としたために強声部が連続している行 -- 14であり、この詩は全部で 2,817行であるから、全体の 11.3%となる。これに対し、Chaucer の *General Prologue*の最初の 100行を調べてみると、弱音節が連続する所に *-en*が生じるのは1例のみ (*ridēn in* 57), 他は *Cáuntērbúrý theý* 16, *Cáuntērbúrý wíth* 22, *Crístēndōm* 49, *dēlyvēre ánd* 84 であるが、16と 22 は普通 *Cáuntērbúrý* [-bri:] と修正されており、49と 84 も *-e*を落とすことで容易に規格に合わせることができる。また、強声部が連続する行が2つあるが、*frēdóm* 46, *lōwelý* 99と分析すれば、規則的な行となる。要するに、説明の困難な行は一つもないのである。

写字生が *-e* を落としたために強声部が連続することになったという14行についてはその可能性が高い。しかし他の不規則な詩行をすべて写字生のせいにすることはできない。例えば連続する弱音節を持つ行で、Smithersが説明できないとした16行の中で、行頭にそれが起こる行 (*Of a tale* 3, *And a* 127, *But bitwen* 936, *Dat Godrich him* 1189等) は O. E. の頭韻詩の anacrusisを思い出させる。また、Smithersは認めたがらないが、強勢が一つ不足したり (*And álle þat líues wére* 1004, *Corúne, so þát it sáwe* 2945), 逆

に多すぎると思える詩行 (*And séyde 'hwát are yé þat áre þer-oute* 1779, *Róberd gróp a stáf stróng and grét* 1891) は詩人の技巧の未熟さを示すのかもしれない。*Amis and Amiloun* の序文の解説にも同様の記述がある。<sup>24</sup>

Many of the verses of *Amis and Amiloun* are irregular. Most of these seeming departures from the normal pattern are probably scribal or other corruptions. Others may be due to a deliberate striving for certain effects on the part of the author, to a lack of skill of the auther, or to influence of the O.E. line. (下線筆者)

#### 注

- 1 B. A. Windeatt, ed., *Geoffrey Chaucer: 'Troilus and Criseyde'* (London: Longman, 1984), p. 64.
- 2 G. V. Smithers, "The Scansion of *Havelok* and the Use of ME -en and -e in *Havelok* and by Chaucer," in *Middle English Studies Presented to Norman Davis in Honour of his Seventieth Birthday*, ed. D. Gray and E. G. Stanley (Oxford: Clarendon, 1983), pp. 195-234.
- 3 T. F. Mustanoja, "Chaucer's Prosody" in *Companion to Chaucer Studies*, ed. B. Rowland (rev. ed, New York and Oxford: Oxford University Press, 1979), p. 75.
- 4 中尾俊夫 『英語史 II』(大修館書店, 1972) p. 458.
- 5 W. W. Skeat, ed., *The Lay of Havelok the Dane*. EETS. ES. 4 (1868; rpt. by Kraus Reprint, 1975), p. xlv.
- 6 G. V. Smithers, ed., *Havelok*. Oxford: Clarendon Press, 1987.
- 7 周知のように *hosen*, *shon*, *eyen*, *housen* などの複数形はシェイクスピアの時代まで使われたし, *broken* や *brethren* は今日でも使われるからである。ただし 'Great Bible' (1539 年出版) には *broke* (p. p.) が見出される。
- 8 H. Takahasi, "A Note on Errors in *Havelok* Manuscript". *Bull. Fac. Sch. Edu. Hiroshima U.* Pt. II, 7 (1984), pp. 1-8.
- 9 -en は写本ではよく -ē と書かれているが, 本稿では区別しないことにする。
- 10 K. Oshitari, Y. Ikegami et al., ed., *Philologia Anglica: Essays Presented to Professor Yoshio Terasawa on the Occasion of His Sixtieth Birthday* (Kenkyusha, 1988), pp. 140-151.
- 11 A. McIntosh, "The Language of the Extant Versions of *Havelok the Dane*." in *Middle English Dialectology*, ed. M. Laing (Aberdeen University Press, 1989), p. 229.

- 12 J. A. W. Bennett and G. V. Smithers, ed., *Early Middle English Verse and Prose*. 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1968), p. 355.
- 13 R. Morris, ed., *The Story of Genesis and Exodus*. EETS. OS. 7 (1865; rpt. by Greenwood Press, 1969), p. xli.
- 14 Windeatt, op. cit., p. 131.
- 15 W. W. Skeat, *The Lay of Havelok the Dane*, 2nd ed. rev. by K. Sisam (Oxford 1915, rpt. 1979)
- 16 実際には49例であるが, (*sellen*) 1629 と *Aboven* (*þo*) 1700 は修正された行にあるので, 数えない。
- 17 J. M. Cowen, "Metrical Problems in Editing *The Legend of Good Women* " in *Manuscripts and Texts: Editorial Problems in Later Middle English Literature*, ed. D. Pearsall (Cambridge: D. S. Brewer, 1987), P. 31.
- 18 2362を Smithers は不定詞の語尾を補わず *wéren tó fyht wóde* と分析するのもしれない。
- 19 T. F. Mustanoja, "Chaucer's Prosody", p. 68.
- 20 アクセントのタイプは異なるが, 古典ギリシア語の韻律では長音節は2モーラ, つまり1単音節の時間の2倍に数えられるということも参考にした。
- 21 Windeatt, op. cit., p. 63 (note 25).
- 22 H. Takahashi, "A Note on Errors in *Havelok Manuscript*".
- 23 第 892行はポーズが第3と第4の強声部の間に来るタイプのところにも挙げてあり, その方が正しいので, 27例となる。635 も両方に挙げてある。
- 24 MacEdward Leach, ed., *Amis and Amiloun*. EETS. OS. 203. (Oxford University Press, 1937, rpt. 1960), p. xcix.

(追記) M. L. Samuels は "The Scribe of the Hengwrt and Ellesmere Manuscripts of *The Canterbury Tales*" (*The English of Chaucer and his contemporaries* (1988)所収) の中で, 写字生Bがいずれの写本においても「韻律上余分な *-(e)n*」を付加していると述べ, ここで取り上げた Smithers の論文を参照するように指示している。そして写字生が exemplar にない *-(e)n*を付け加えたのは, それが彼自身のつづりであり, 彼が韻律学者でなかったからだと説明している。しかし, Smithersは弱音節や強勢のある音節が連続しないという前提から出発し, 写字生による付加という考えに達したのであるが, Samuelsは別の論文 "Chaucerian Final *-e*"で, 弱音節が連続するのを認める趣旨のことを述べている。すなわち

It is a commonplace that decasyllabic verse abounds in the speech-rhythms of Sievers's half-line types; but they contribute more to the variations

than to the norm, and the two levels should not be confused.  
と言い、Smithersと異なり variations の存在を認めている。また Chaucer の “medium” を彼の followers のそれと比較し, “its higher proportion of genuinely unstressed syllables gave it a delicacy and lilt similar to that of the earlier Middle English lyrics.” と述べている。もしこの考えに変わりがなければ、そう簡単に Smithers の説に与することはできないはずである。

また、Samuels は “Chaucer’s Spelling” において、多くの校訂者が依拠している Ellesmere と Hengwrt の両写本のつづりは写字生自身のつづりであり、Chaucer 自身のつづりは *Equatorie of the Planetis* のそれであり、これは短いテキストであるが, “an authentic and autograph work of Chaucer” の可能性があるという重要な指摘をしている。しかし、この論文より前に (1974 年に) 出版された D. Brewer 編 *Geoffrey Chaucer* に寄稿した E. T. Donaldson は “The Manuscripts of Chaucer’s Works and Their Use” において、Chaucer が天文学に興味を持っていたという事と *Chaucer* という筆跡が別の文書にある彼の本物のサインと似ているという根拠だけでは全く不十分だとして、*Equatorie* を Chaucer 本人の作とすることに慎重な態度を見せていた。このたび Samuels はつづりに関する 11 の基準から、その筆跡が Chaucer 自身のものらしいという結論を引き出したわけで、今後の議論の成り行きが注目される。